

【福島大学むらの大学アーカイブ 5】【川内 Chapter 5】

震災・復興を経て見えた、公務員としての立場

井出寿一さん



インタビュー日時：2023年10月18日・11月29日

インタビュー場所：川内村立川内小中学園

聞き手：久保田苺吹、佐藤飛鳥、佐藤光、松浦歩夢、千葉偉才也

プロフィール

1953年10月に川内村高田島生まれる。川内第三小学校、川内中学校、相馬農業高校を卒業後、農業を行う予定であったが減反政策があったことで、川内村役場で働きながら兼業農家として生活することになる。川内村役場には42年間勤め、2014年に定年退職となり、60歳から環境省にて3年間、直轄除染に携わる。その後、福島発電㈱を経て、2019年に一般社団法人かわうちラボの立ち上げに関わり専務理事兼事務局長として3年間務める。現在では川内村第一行政区長、川内商工会理事、川内村社会福祉協議会理事、かわうちワイン㈱取締役、あぶくま川内取締役、及び総務省の行政相談委員。

1. 震災前の川内村

—自己紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。

井出：井出寿一と申します。生まれも育ちも川内村の高田島地区ですね。私は高校卒業で、その時代は、先ほど猪狩幸夫さんも言うておられました、農家の長男だから、当時は何でかんで農家を継がなければならなかったのね。だから、私も農業高校しか出てないのです。

それで大学進学への道はなくて、うちは父親が反対したために、また一人っ子なので、親としては、私に家督相続をさせたかったんでしょね。そんなことで農業やる予定でしたが、ちょうど私が高校を卒業した頃に、国の減反政策っていうのが始まって、田んぼを減反しろということになって、じゃあ、働きながら兼業農家をやることになって、川内村役場の試験を受けたらば、たまたま合格しちゃったのよ。

それから川内村役場にずっと、42年間勤めておりました。村でも、仕事は誰にも、大学は残念ながら行くことできなかったが、もう大学卒の人には負けたくないっていう気持ちで一生懸命、この仕事は俺しかできないっていうのが取り柄でした。当時はね。

60歳定年退職となって、村で除染という行政をやってきたので、それを活かすため環境省に3年間おりました。環境省では、任期付き職員だったのですが課長補佐という身分で、そのときの担当が富岡町と双葉町、それに田村市、葛尾村担当でした。いずれも20キロ圏内は環境省が行う直轄除染でした。それと合わせ廃棄物処理、家屋解体とか、そういったものをしてきました。そして面的な除染が3年間で終了したため、引き続き残る道はあったのですが、元の福島県職員から誘われ、そのあと福島発電株式会社に行きました。これは福島県が、風力や太陽光といった再生可能なエネルギーを、ここから地域から電気を作って、さらに首都圏に流そうっていうのが福島県の狙いなものね。そうすると、これまで原発、第一原発、第二原発、広野火力って、福島県にありながら首都圏に電気を輸出してましたね。

それでその送電線を使って、原発に代わる手段として太陽光とか風力で作られた電気を首都圏に流すことで、福島県知事が国に要望し、国では当時、安倍首相のプロジェクト事業だったのね。

福島県はもともと電気を作っていたんだから、エネルギー基地だったんだから、原発がなくても再生可能エネルギーで、電気をまた首都圏に流すっていうことになって、そのお手伝いを福島発電のほうで3年間担当しておりました。

そのあと、65歳から66歳になるとき、今度は村の方から、村づくり公社のかわうちラボを立ち上げるため、かわうちラボの事務局長兼専務理事を依頼されて、ここでは3年間務めました。ちょうど70歳を迎えることからその職を辞任し、去年、高齢者の働く機会の場ということで、村単独で、銀より金が・・・の思いで、シルバー人材センターならぬかわうちゴールド人材センターを立ち上げ、今は、ほぼ毎日、草刈りや掃除をしております。

そんなことで、今でも、やっぱり川内村役場で、この仕事は俺しかできないっていう自信を持って仕事をしていたので、村の活性化のため、かわうちラボの理事として残りながら、いろんな役職を務めております。そのほかに、総務省の行政相談委員というのもお世話になった村民のため仰せつかりました。

その外には、川内村第一行政区長や川内村商工会の理事、それに川内村社会福祉協議会の理事とかかわうちワイン(株)の取締役、(株)あぶくま川内の取締役もやっています。(株)あぶくま川内は、村の交流施設の指定管理者で、いわなの郷とかかわうちの湯とビジネスホテルの取締役もやっています。そんなところが自己紹介か

な。

—高校を出て、川内村で就職されたとおっしゃったと思うんですが、高校、どちらに？

井出：相馬農業高校です。当時は農家の長男っていうと農業しかなかったの、川内村の産業は農業だから、だから、何でかんで農家の長男は農業をやるしかなかったの。一人っ子だったから。

—中学まではずっと川内村ですか。

井出：船で行けない高田島っていう地域があるんですが、そこに高田島の川内村立第三小学校を出て、川内中学校は一つなんです、当時、川内村は6400人ぐらいの人口おり、もう同級生はなんと172人ほどおりました。しかし今は7人ぐらいしかいないから。そして高校は相馬の方で3年間、下宿して農業経営を一生懸命学びました。で、戻ったら農業をやろうかなと思ったんですが、昭和47年に卒業だったので、ちょうどこの頃は日本がもう農業の変換期で当時は食糧管理法っていうのがあって、米は政府が全て買ってくれたのね。

ところが、日本の田んぼが多くて、当時は、30年代から40年代にかけて、どんどん、どんどん開墾して、もう米を作るよ、米を作るよっていうことになって、米さえ作ると、政府がもう高い値で買ってくれたのね。

今、60キロ、1俵で1万1000円ぐらいなんです、当時は2万ぐらいしてたの。で、農家ってすごく当時はよかったんだけど、昭和47年に、ちょうど日本の農業の転換期です。米が余ってきたから、もうこれ以上作るなという減反政策が始まったのも昭和47年ですね。だから、うちの親父も俺も、じゃあ、もうこれ、農業では食っていけないなということになって、あなたたちと同じように村の役場に募集していたので、それに応募したら受かっちゃったというので、村役場に勤めながら、農家のお手伝いをしたということですね。

—そうすると、お一人っ子っていう話だったんですけれども、じゃあ、おうちはずっとご両親と寿一さんの3人だったんですか。

井出：おじいちゃん、おばあちゃんもいたから5人ね。ただ、うちの親父もおふくろも、当時結核っていう病気、結核に感染しちゃって、もう私が昭和の20年代に生まれた頃っていうのは、結核って不治の病だから、結局、治らないのね。

そうすると、うちなんか、俺も聞いた話なんだけど、うちすごい貧乏で、親父もおふくろもどっちも結核にかかっちゃって、うち、おぎゃあって生まれて、うちの実家にはいなかったそうです。おふくろの、同じ高田島なんだけど、そこにいて、育てられて。

だから、うちのおふくろも親父も、ずっと関東で入院していたの。だから、もううちはおじいちゃん、おばあちゃんと、親父の弟が何人か、5人ぐらいいたのかな。で、そういう大家族の中で、私が小学校に上がるときに親父もおふくろも退院して、一緒に住むようになったの。

★震災以前の暮らし

—震災原発事故以前の暮らしについて教えてください。

井出：何度も言うように、川内村ってやっぱりこの原発があったからこそ専業農家がなくなっちゃったの

よ。もともと専業農家がかなり多かったのよ、川内村。でも、うちもそうなの、もともと専業農家だったの。おやじが働けなくなっちゃって、保険会社に勤めて、で、長男の息子、寿一君も役場に勤めていたから、兼業農家がどんどん、どんどん多くなっちゃったのね、昭和47年を皮切りに。減反政策が始まったって言ったでしょ？だから、川内村は専業農家から兼業農家、兼業農家も第1種、第2種ってあるよね。就業が主の2種兼業っていうんだけどね。で、専業農家から第1種兼業農家、2種兼業農家、2種兼業農家がどんどん、どんどん多くなってきたの。で、これはどうしてかっていうと、米の値段が上がらないから。そして、原子力発電所に雇用の機会を設けるようになっていっちゃって、みんな勤めるようになっていっちゃったの。で、井出家も、私も、農業をやりながら役場に働いていたということで、震災前の、原発のできる前っていうのはそういうことだったのね。

でも、原発ができてからも、やっぱりその状態は変わらなかった。で、昭和47年じゃなくて、昭和五十年だっけ？第一原発が、1号機が動き出したのね。で、そのときからっていうのは、双葉郡全体的に、川内村も含めて大部分が東京電力に働くようになっていっちゃったわけね。井出家においてもそれは、井出家は高田島って言ったけども、高田島って100パーセント専業農家だったんだわ。それが、その震災前は、専業農家から2種兼業農家に移行していったっていうので、農業が主だね。井出家においても、私も公務員なので、役場に働きながら、当時は田んぼも作っていたし、養蚕って分かる？カイコさん。養蚕もやっていたし、葉たばこもやっていたし、本当に農業よりも、農業がもともと主だったんだけど、農業収入よりも、いつの間にか給与所得が多くなっちゃって、私も震災前までは、完全に水稻はやめて、そば畑にして、そばを耕作していた。約1ヘクタールのソバを耕作していた。それが震災前の状況だね。はい。そんなとこかな。

ー井出寿一さんは井出家の長男？

井出：うん、長男。

★川内村という地域

ーこの地域は、次男以降は村外にでるといのが一般的でしたか？

井出：うん。集団就職列車って分かる？集団列車って、あれってやっぱり日本の高度経済成長時代だったんだけど、ここも富岡駅から、次男、三男、もう長男以外は全て、女の子もそうだけでも、女の人も、次男、三男もみんな、首都圏に働きに行っちゃって、長男と、それから、うちによっては娘だけ、長女しかいないところもあるので、そういう長女は残っていて、みんなやっぱり働きに行っちゃったのが、日本の過疎化、川内の過疎化の源だったんだよね、当時は。

ーそういう集団就職とかで上京していたころは、そのあと地域に戻ってくるということはほとんどなかった？

井出：いま川内村も、Iターン、Uターン、Jターンってあんだけど、川内村は、Uターンする人はほとんどいない。やっぱり一回出ていくと、お父さん、お母さんが残ってるよね。息子が、娘が関東だ、神奈川だ、東京だって行って、そして、年寄りで自分たちが生活できなくなって、初めて東京から迎えに、都会に来て、と言って、都会に行ってしまうと、その家は空き家になっちゃう。もしくは村内の家で死亡するかですね。

なので、結局、川内村の空き家が今 130 戸ぐらいあるんですが、その空き家の現象っていうのも、やはり高齢化社会の原因になってる一つだよな。

もう本当に老老介護っていう言葉あるけども、70 歳の娘が 90 歳代のお父さん、お母さんを看病するっていうのと同じなんだけども、老夫婦で生活できなければ、都会に行った娘さんとか息子さんが呼ぶっていうのがあって。

だから、川内って車がないと生活できない地域だから、買い物、病院、こういったところができないので、だから、一人暮らしっていうのはそういうリスクを負うのでしょね。井出家もおそらく俺が運転できなくなっちゃえば、おそらく息子、娘が千葉と埼玉にいますけども、たぶん来いと言われるんじゃないかな、そうなってくると、もっともっと川内は、現実的に人口は減少するでしょうね。

—老々介護の話まで行きましたが、震災前は集団就職も含めて、そういう構造は基本的に 2011 年 3 月 11 日までずっとそのような流れがありましたか？

井出：うん、そういう流れだね。で、川内村って、俺、いつもお話をすんだけど、結局川内村に住んでいる人、住まない人、それぞれありますが、結局川内村って 12 月ぐらいから 3 月ぐらいまで、結構気象条件が厳しいのよ。時にはマイナス 10 度ぐらいになって寒いから、みんな、温暖な地域、例えば首都圏以外については、富岡町に家を造ったり、大熊に家を造ったりして、だから、結局そういうので、どんどん川内村が過疎化になっていく原因になっているけども。だから、震災前もそういう状態なのね。川内村はどうやって、じゃあ、生活していくかっていうと、いろんなイベントを仕掛けることによって、交流人口拡大っていう言葉あるけども、その交流人口拡大に向けていろんな取り組みがなされているよね。

川内三大祭って、6 月の「ドウダンまつり」と 7 月の「天山祭り」と、11 月の「かわうち祭り」、いわゆる「そば祭り」って、昔は「きのこ祭り」って言ったんですが、これが三大祭なのね。

そのほかに、「BON・DANCE」とか、トライアスロンとか、かえるマラソンとか、いろんな形で交流人口拡大に向けて、川内村に来てちょうだいっていうことで、そのターゲットになっているのは、川内村以外から人を呼び込もうということなのよ。

そういうのは、震災前の状況。だから、俺なんか生まれた頃は、人口が 6400 人ぐらいいたのよ。で、震災時っていうのは 3,038 人しかいなかったんだけど、じゃ、6,400 から 3,000 人って、3,400 人減少しているよね。それって先ほど言ったように、日本の高度経済成長とともに子どもたちが、もう中学校、高校卒業すると、みんな首都圏のほうに流れていっちゃったのが、この過疎化の要因になっているわけだからね。

2. 震災時の川内村

★2011 年 3 月 1 日の川内村

—2011 年の 3 月 11 日はどちらにいましたか？

井出：これは当時、川内村役場で、当時は 57 歳かな。57 歳で、ちょうど 3 月議会定例会っていうのがあって、それは新年度予算を決めるための、村長が提案した案件を議会で審議して可決すると。ちょうど議長が、じゃあ、これで 3 月議会を閉会いたしますということで、閉会宣言をして、また 2、3 分たってからですね。

で、議員も村長もみんな、議場の役場の 2 階に、まだ皆んなおりました。で、そのときに地震があつて、この当時、実は、ちょうど議員の改選期だったので、議会が終われば新年度予算も、当時 37 億円ぐらいの予算だったんだけど、予算が通ったので、これで新年度予算も可決したので、これで議会を閉会しますって、議長が閉会宣言をして、もう 2 分ぐらいたってからです、地震がなったの。
はい、だから川内村役場内におりました。

一どのように寿一さんは村から避難しましたか？

井出：何でもいい、わしは役職で、とにかく住民の生命、財産を守るのは公務員としての公僕なので、それは公務員の使命だったので、私も役場におったんですが、3 月の 11 日、地震があつて、そして 3 月 12 日に富岡町が避難してこられました。で、この川内小学校も避難所になったので、川内村は当然、当時の人口が 3000 人だったんですが、富岡町が 1 万 2000 人ぐらいに、川内村に 3 月 12 日から 13、14 日ぐらいまでは 1 万 2000 人ぐらい、ここで生活しておったんですよ。

で、3 月 12 日の午後 3 時 40 分ぐらいに第一原発が爆発して、建屋が爆発して、これで富岡町の住民は、実は 3 月 12 日、午前 10 時頃第一陣が避難してきたときは、これま富岡町の幹部でしたが、井出さん、川内村に 2~3 日程度置かしてくれと、そういう着の身着のまま来て、いずれ避難解除は、国のほうが解除されるだろうからすぐ戻れるっていう感覚で、富岡町が急きょ避難してきました。

もう、地震でいわきのほうには 6 号線は寸断されて、北のほうも双葉と大熊の間の道路が寸断されて、みんな浜を通過して避難することはできず、みんな西のほうに避難するしかなかったんだよね。で、富岡町も、一部大熊町住民も川内村にいたのですが、その県道、小野・富岡線っていう道路があるんですが、そこで川内村に来られたんですよ。だから、この小学校だけでも、一時は 5・6,000 人ぐらいいましたね、富岡町民が。

一避難して井出さんもビッグパレットふくしまに行ったのですか？

井出：そして、川内村の人が、結局村民もみんな、防災行政無線で、今は富岡町が川内村に避難しております。まず、当時は寒かったので毛布とか、あと、食べ物、お米、野菜がありましたら最寄りの集会所に届けてくださいということで、集会所にはもうたくさんの米とか毛布とか、そういう暖を取るための、そういう寝具類なんかも集まったのね。それを各避難所、当時 19 の施設に約 8,000 人ぐらいいたから、それにみんな配っておったんですが、極め付けは、第一原発が 1、3、4 って建屋爆発して、3 月の 15 日になると、実は 3 月の 14 日の未明に、国は第一原発の 2 号機をベントしたのね。それで、大量の放射性物質がまき散らかされたために、3 月の 15 日、当時民主党政権の枝野官房長官、枝野幸男さんっていたんですが、その人がテレビで、川内、20 キロから 30 キロは、いま屋内退避となりましたっていうことで、屋内退避っていうのは、結局大量に放射性物質がまき散らからされたので、外にいる人は中に入ってください、窓とかエアコンは閉めて、シャットアウトだよと、外の空気を入れるなど、放射線に被爆するからっていうことがなって、じゃあ、この川内村にいること自体がまずいだろうということになって、これは富岡町が避難してきたときに、川内村役場の 2 階の大会議室で、何度も何度も何度も、災害対策本部を富岡町と一緒に開いて、最終的に富岡町長と川内村長は、じゃ、川内村にいても危ないのだったら、もう福島県の県知事は会津若松市を指示したんですが、もう郡山のビッグパレットに行こうということになって、3 月の 15 日の夜 9 時ぐらいに避難を決定したの。

★避難する際の、井出さん個人の気持ち

ー総務課長としてではなく、一村民として避難をして川内村を離れるということに対する心境や当時の思いをお聞かせください。

井出：そうだね。これ本当ね、何度か、お話しはしているのですが、一個人的には、やっぱり寂しいね。前もお話したかもしれませんが、うちは女房と、おふくろがいたのね。当時はね。で、3人しかいなかったけど、もう子どもたちはそれぞれ、あの時点ではそれぞれ就職していたから、もう子どものことは全然心配なかったけど。まず、うちのことを考えるよね。誰もね。いやあ、もう地震で毎日帰れないから、おふくろは大丈夫なのかなって、そういうことを考えるね。

たまたま、あの、まあ3月11日、地震があって、その夜は何とか、うちには帰れたのですが。12日からというのは、ほとんど帰ることができなかったのね、どうなっちゃっているのかな。やはり、原発の1号機の建屋が爆発したとか、3号機の建屋が爆発したと聞くと、やっぱり、我々も死んじゃうのかなって。まず、そこで本当にね、その爆発してからというのは特に、死というのは、もうね、その死んじゃうという考えが頭にあったから。その程度しか当時はなかったからね。

だから、その中で避難する時は本当にね、寂しい思いだね。本当にね、今でも、当時のことを思い浮かべると涙がでてきますね。そして住民の避難が終わって、夜9時ぐらいに、役場の戸を閉めながら張り紙を張って。川内村は避難しますからというメッセージを残した。また家庭のことちょっと話をすると。実は3月の14日なんですよね。1、3、4号機が立て続けに爆発して、村長もゆふねの施設に行ったらしい。で、うちの女房も実は共稼ぎだったので、あの保健福祉課のゆふねに居たのよ。もうこれ以上いてもど、もう避難できる人は避難してもいいよということを村長が言ったらしいのね。でも実際に川内村、今度、役場の本庁舎では避難していいなんて誰も言ってないから、そこでちょっとボタンのかけ違いもできちゃったみたいです。うちの女房は、もう避難してもいいというから、あの3月15日、家に一時、着替えのため帰った時に、実はもう誰もいないのね。もう寝ているのか。午前1時、2時ごろ帰ったのですが・・・その時点で、家に誰もいないのよ。あれっ、おふくろの部屋も誰もいないし、女房の部屋にもいなかったし。あれっ、どうしたかな。ああ、これは俺を置いて先に逃げちゃったんだわと思いました。その時点でわね。この話は前にも言いましたか？

ー少しお聞きしました。

井出：ああ、そうか。で、もう一度言うと、で、うちに3月15日に帰った時に、すでに家から埼玉の大宮市に避難した。この時は、村内で何があったかという職員も村民も初めて経験する大パニックであったのね。役場の庁舎内に議会議員とか区長さんを集めて、夜9時半ぐらいに、村長は涙ながら。まあ普通、議会だって区長だって言うこと聞かない人は言うこと聞かないから。でも、その時は村が一つになったね。村長はまず涙をこぼして、これから川内村から避難するんですが、議員の皆さま、区長の皆さま、どうでしょうかね、ということを知ったらば、やっぱり、みんなで避難するしかないでしょう。村を離れるしかないでしょうということで、みんなね、本当に涙ながら、それは了解したの。

まあ、そんなこともあって、家に戻って、俺もじゃあ、あした16日は、家を離れるんだなと。その前に家族も避難させなくちゃならねえなって思った時に、家に帰った。そしたら、もう既にもいないのね。あっ、これは俺を置いて先に避難したんだな。

川内村は、3月の12日までは何とかね、携帯は通じたのね。で、13日から全く携帯が繋がらなくなっちゃって連絡しようがないのですよ。もう、この職場にいると職場同士のコミュニケーションはいいんだけど、誰から電話入るとか、そういうものはほとんどなくて、衛星携帯が2台ほど、配置されたもので、その衛星携帯すら、南の方向にアンテナを向けるらしいんですが、それだって、なかなか個人的な話ではできないからね。

家に帰ったら本当に、これは俺を置いて行っちゃったわというのがまず、あって。それはそれで構わないんだけど。でも、居間を見渡したら、このこたつの上に、母を連れて、大宮の娘のところに行きます。ああ、これで俺はよかったと。じゃあ俺はもう自由なんだなということで、少しそこで仮眠したのかな。で、まあ風呂も入らないで、そのまま寝ちゃったんでしょね。

また朝になると、あたりはまだ暗く、2時間ぐらい仮眠して、また役場に行くと、今度はね、避難する、どうしようかというのを考えたから、ほとんど3月11日からは、家に帰ることもできなくてですね。平均、夜3時間か4時間ぐらいしか寝ない時代だったから。でも、それでもね、本当に病気もしなかったし。だから、そんなことをずっとやっていたから、最終的に、じゃあ3月16日、もう避難をさせて、どうやって避難させるかなということを考えながら行動をして。で、最終的にマイクロバスで避難をさせるのですが・・・。

俺この話したかどうか分からないけど。最終的に残ったのが、俺はずっと村内と役場において、そして村民、その時、避難できない人が、まあ50人ぐらいいたのですよ。そうすると、同じ総務課の横田正義さんてご存じでしょうか。総務課長で定年退職して、まだ再任用職で総務課にいたのですが。その横田さん、まあ当時係長だったのですが、係長と一緒に俺らは、どうせね、もう被ばくしているから、もういつ死んでもいいのだよって横田さんと話しながら、村民一軒一軒回るので。そして、今から避難しますから、どうしますかということになって。そして、その村民の皆さんは、じゃあ俺らも避難しますから、ということで、また避難できない人も、どうぞ避難してくださいと。

その村民の皆さんも、そこでは、もう避難できない人というのは、そこでは死んじゃうという考えを持っていたのでしょね。だから言葉少なめに、そこでコミュニケーションを取りながら、そういう対応をしてきて、それで役場に戻ると、だいたい3時頃、つまり16日の午後3時ぐらいになると、あのマイクロバスがね、郡山に送って行ったマイクロバスが帰ってくるんですよ。

そこで、村内の三瓶商店というところからドラム缶で燃料を確保していたので、それで、雪のちらつく中、バスに燃料を補給するんですね。そして村長も、それ見て、何、総務課長、そんな自らやっているということになって。でも、やる人がいないから仕方ないんですということでも言いました。

そういう思いがずっとあった時に、さて、郡山にまた第2陣の避難する村民を乗っけて、また郡山のビッグパレットに行くわけですから。で、戻ってきたのが、だいたい夜の8時半ぐらいなの。もうあたりは真っ暗になっていたよ。

そうすると最後に残ったのが、村長以下、村の職員が3人ぐらいいたかな。あと富岡は、やっぱり富岡町長もまだいたのですよ。職員も5、6人いて、じゃあ、我々も役場の庁舎を閉めて鍵を閉めて、行きましようと言った時は、もう9時過ぎでいました。

そうすると、ちょっと待ってよと。じゃあ役場庁舎の入り口に、今、川内村はビッグパレットに避難しましたからご用のある方はビッグパレットのその当時の電話番号を分かっていたので、そういうことで張り紙を張って、じゃあ、我々も行こうということになった時に、俺はもう何度も、これも言ったかも分か

らない。もう自分は川内村に残るよと。避難しない人もいたので残るよということを経理には言ったのですが。経理からも「お前が行かなきゃ、ビッグパレットはどうするんだ！」ということになっちゃって。そしたら、住民課長の横田善勝さんがですね、じゃあ俺がいるから総務課長は行ってビッグパレットで避難の対応をしてくれよということになったのね。じゃあ分かりましたと。ちょうど、今の議会の事務局局長を勤める渡邊政美さん、当時、住民課の消防担当をしていた係長も、じゃあ横田課長と一緒に残るからと言って、2人残ったのね。

俺は大型免許を持っているので、その帰ってきたマイクロバスを運転していく高知尾になった。事前に「経理どうしますか。経理も乗っていきますか？」と言ったら、経理は、道中なのでわたや商店（自宅）に寄って着替えを持っていくから、いいですよということになって・・・

一なるほど

井出：これで俺1人、郡山に向かうことになって。夜9時半ぐらいだと思うのだけど、ずっとマイクロバス運転しながら、ひたすら、都路経由で、あのビッグパレットに向かうのですよね。そうすると都路村に入ったとたん、だいたい川内から都路まで、10分ぐらいなのね。10分ぐらいの時は、まだ気持ちが緊張感でしっかりしていましたから。だから、これからのビッグパレットのことしか考えないのね。

そしたら都路を通り抜けようとした途端に、あの携帯がもうジャカジャカ、ジャカジャカ、もう今まで通じなかったから。都路に行った途端に携帯がすごく入って、もう本当に100件、200件ぐらいの入ったのね。そこで、現実に戻ったね。ああ、そうか。我々も今、ビッグパレットに行くのだな。そうすると既に3月議会で新年度の予算は可決したし、これから村はどうなっちゃうのかなということになると、この時点で自然に涙が出てきた。家族はどうなるのかな。本当に村は、どうなるのかなということを経理にすれば、涙がね、本当にずっと出てきたね・・・

もう自分で、運転しながら大声で泣いていたと思う。だから泣くということは前が涙で見えなくなるので、目をこすりながらですね、本当に寂しかったね。本当に寂しいというのが、今まで経験したことないのね。ああいう寂しさは。いろんなことが、走馬灯のように頭の中が、こう、カシャカヤ、カシャカシャ回っているのだけど。今後のことしか考えないもん。今までの過去のことには考えない。これから、どうなるのかなということを経理に考えると、2、3年どころか10年ぐらい戻れなかったら、どうなるのだろうかということも、いろいろ考えましたね。

だから、その時の心境というのは、まあ語り、口では語りにくいような、その、まあ寂しさ。寂しさだけが、こみ上げてきたね。これ本当、今でも、この話をすると、自分自身が感情的になってきます。はい。ちょっと、うまい言葉で、それ表すことできないね。この感情は。ビッグパレットについたらそれは薄らいだね。それが、もう急に変わっちゃったのは、この目の前にいる人をどうやって、避難生活をさせるかというのがあるから。マイクロバスだから道中の間の1時間20分ぐらいかな。この間だけが本当に気の狂いそうな寂しさ、むなしさがありました。

都路から船引を通り、郡山市に向かったのですが、道中も電気も暗いし、どうなっちゃっているんだろうと思いながら、運転していったよ。村内から出ることがなかったことから、船引とか郡山に行ったら、もう当たり前で電気がついていて、コンビニとか、いろいろと明るいなんだろうなと思っていたから。・・・でも郡山だって本当に暗かった。これはやっぱり、すごい原発災害なのだから。当時は、原子力災害だということというのは、その時思ったしね。まあ本当にそんな心境だったね。

★ビッグパレットでの避難生活

ービッグパレットふくしまに移ってから帰村宣言があったと思うのですが…

そうだね。帰村宣言あったのだけでも、その前に、3月の15日、16日に、結局、富岡町の人は自家用車で川内村を避難したんだけど、結局、当時って、それからなかなかガソリンも手に入らなかったの。だから、富岡町民もガソリンがなかったことから、大部分の方が自家用車は、このグラウンドに置いていきました。

で、燃料切れの車の方はどうしたかっていうと、川内村と富岡町と、マイクロバスで、もう16台ぐらいあったし、しかも富岡町は埼玉県の杉戸町から、大型バスが7台来て、それで、杉戸町のほうに連れていかれた人もおりました。川内村は、杉戸町には関係ないんですが、震災前から富岡町と杉戸町が姉妹都市を結んでいるために、富岡町民が連れていったんだけど、間違っただけに川内村の村民も15人ぐらいは乗っちゃったんですよ。で、杉戸町に避難した例もあるし。

あとは、車のない人は、マイクロバスで送迎して、2往復、3往復したんだよね。郡山とビッグパレットふくしまに行ってからなんですけど、ここにいるときも、もう本当にこの5日間、地震があつてから5日間っていうのは、私もろくろく家に帰れなかったの。どうしてかっていうと、いや、何が足りない、かかが足りない、ここはどうすればいいんだってということで、防災計画って市町村にはある、作んなくちゃなんないんだけど、富岡町もそうだけど、富岡町は村外に避難するっていう体制がなかったのよ。

川内村も雨が降ろうが雪が降ろうが風が吹こうが、今まで避難をさせたことがなかったの。でも、今回だけは川内村も20キロ圏内は避難誘導しましたがして、20キロ圏内が約300人ぐらいおりましたから、第8区のほうに。だから、3月の14日には、川内小学校、中学校に避難してくださいってということで、防災行政無線で誘導したのですが、富岡町もそのようなことで、着の身着のまま来たっていうことを申し上げましたけども、本当に2、3日で戻れるということで避難してきたんだけど、3月の12日の爆発したときに、初めてこれは長期化になるということで、我々も、私も、本当に防災計画ないことだから、もうやることなすことが、誰が判断してどういうことで、どういう指示をしたかなんですよ。

だから、村長に言うと、おまえのいいようにいいよって、村長には言われていたので、職員の対応とか、富岡町の避難民の対応とか、ビッグパレットに行ってもそうなんだけれども、全て、最終的に重要な案件については村長にも一応確認をして、こうでいいですか、それでいいよってということで、村長は、まあ同意をしてくれた例もあるし、そういう判断が、全然もうマニュアルにないことなので、もう自分の考えで、当時は行くしかなかった。

それで結果的にビッグパレットに行ったのですが、ビッグパレットに行っても、当時3月16日の9時ぐらいに着いたんだけど、もう本当に何人いたか分かんない。とにかくトイレの入り口から、ずーっと廊下から、通路から、もういろんな施設に、おそらく1万人はいないでしょうけども、七、八千人ぐらいいたかも分かんないな、ビッグパレットに。本当にもう何がどうなっているのかは、ビッグパレットもよく分かんなかった。一番困ったのは、食料ね。実は、ビッグパレットの館長さんの指示で、きょうは川内村は何人です、富岡町は何人です、じゃ、これだけ注文してください、朝昼晩注文してくださいって言いながらも、次の日になると2000人ぐらい増えているんですから。だからもう食料も絶対足りなかったのですが、でも、3月20日ぐらいからは、徐々に、徐々に、いろんな救援とかそういうのがあって、また炊き出しとか、そういういろんな会社が支援していただいて、ビッグパレットはおそらく福島県内一恵まれ

ている避難所だったのではなかろうかなと思いますね。

こんなこともありました。青森からリンゴを関東に、東京まで行くのですが、東京まで行けないから、もう郡山駅で落とします。で、リンゴ 3000 箱だか、箱に 3000 箱あって、そして、ビッグパレット、大変でしょうから、川内、富岡、いるのであれば、駅のほうでビッグパレットに運びますからということで、リンゴばビッグパレットの入り口にどんと積んで、みんな一箱ずつ持っていましたよ。

そのぐらい本当に郡山市の、4 号線はそうですけど、あと 49 号線も通っているし、新幹線は当時、不通であったが。東京と那須の間で折り返し運転をしていたな。だから新幹線は郡山駅には当分の間、通過することはなかったのですが、高速道路も使えなかったのですが、でも、流通面では、もう本当に最高ですし、当時の避難所としては最大の避難所だったですね、ビッグパレットは。とにかく統率がなかなか取れなくて、どこに誰が、どんな部屋に誰がいるのかっていうのが、把握するまで約 1 か月かかりましたね。

だから、仕事の面でも、俺はもうこの仕事は俺しかできないんだって自分に言い聞かせたの。いちいち村長に何うのは、もう面倒くさくなったの、当時は。村長も忙しいし、これは俺が判断すべきだなと。こういう大事なこと、例えば避難を受け入れるとか、避難を決定するというのは村長にも判断を委ねましたけども、大体自分の判断で決めました。当時、総務課長という身分だったので。職員の対応とか、避難所の対応は私がほとんど単独で決定した事項が多いね。あと、事後報告も村長には、とりあえずしましたけどね。

でも、自分自身は、俺は本当に、この仕事は俺しかできないからって、そういう自信を持ってやることにしましたね、あの当時も。そんなこと考えていました。

★誰もがわからなかった放射線

—実際に避難者対応を行ったときに、避難者の方からどのような声を聞きましたか。帰村をしたいとか、そういう声はありましたか。

井出：当時の最大の難関は、やっぱり放射線。本当に放射線について勉強不足だったから、そういう知識も何にも持ってないから、今でこそ何マイクロシーベルだと、これだと安全だよって言えるんだけども、やっぱりそれが一番村民からも聞かれましたね。

だから、私たちがいくら勉強して答えても、村民の人はそれを信じない。そんなこと言ったって、川内村が何マイクロもあって、もう戻れないでしょうって言うので、村民に褒められたことは一度もなかった。いつも苦情ばかり言われていましたね。

除染にしても、それから復興の仕事やっても、本当にもうかわいそうなもんだよ、この井出さんっていうのは、本当にいじめられっ子だったから、当時は。特に放射線については、皆さんも分かんないし、俺らも分かんないし、もう勉強したことを言っても村民は信じてくれませんね。

★帰村するにも障壁ばかり

—帰村宣言を発令されたときに、井出さんとしては、帰村をいま進めるべきだとは思っていませんか。

井出：避難区域は 2011 年の 9 月 30 日に解除するから、川内村は来年戻るようであれば、復旧計画を作りなさいってということで、私、当時、村長に言って、じゃ、私が復旧計画作りますからって行ってビッグパレットで、本当にもう避難所イコール職場だったので、郡山出張所、川内役場郡山出張所っていうのをつくりましたけど、だから、目覚めると、もう仕事してました。

で、そのときに復旧計画を作れということになって、最終的に川内村こう、こう、こういうわけで復旧します、川内村に戻ります。最終的に、じゃあ、この何年何月何日に戻ると、帰村するっていうことになったときに、村長に、いつ戻りますかっていうと、村長は来年4月かということになって、初めて平成24年3月31日っていう数値を入れました。それで復旧計画を国に提出したの。

そして当時は、川内、広野、田村、南相馬っていう、この4市町村が、緊急時避難準備区域で、避難区域解除するよっていうことと言われたのですが、当時は原子力災害対策本部って、福島県にあったんだけど、その現地本部の方で審査して、川内村の復旧計画、よくできていますっていうことで褒められて、そして、帰村宣言をして戻るようにしますっていうことで申し上げたら、川内村の帰村宣言、いつやりますかっていうことになったのですね。

それは、村長は、本当は2011年の12月末にやる予定だったのですが、それが川内村の診療所、川内村診療所っていうふうにあるでしょ。当時は鈴木内科医師だったのですが、鈴木先生も、俺は放射線に対して後ろ向きだから、おれが戻るっていうことになると、村民の人はみんな安心するから、俺は戻らないって、鈴木医師が言うわけね。

で、先生、そんなこと言わないで、来年4月に学校も再開するし、診療所も再開するから戻ってくださいということをお願いしたんだけど、それは、俺は戻らないということになって、それで説得するのに1か月、2か月かかっちゃって、最終的には2012年の1月31日だったと思うんですが、福島県庁で帰村宣言を村長がしたの。そういうエピソードもあるの。

で、そのときに口説いたのは、鈴木氏に対しては、私がこういうことを申し上げた。もともとその鈴木医師というのは、いわき市出身で、採用するときも、私が鈴木氏宅に行って直接交渉してきたから、俺もすごく責任があるのね。鈴木先生、何とか戻ってくださいって、もう3年目ぐらいだったんですが、あの地震があって、東日本大震災があったのね。

で、そのときに俺は戻らないっていうことになって、すごく口説いたのですよ。これは長崎大学の高村先生にも、お話をしてもらって、放射線についてお話をしてもらったりしていたのですが、やはり俺は戻らないって。

じゃあ、困っちゃったな、来年4月、診療再開できないんじゃない。村長に言って、とりあえず今、お医者さんの確保はもう3か月ぐらい余裕あると何とかなるから、とりあえず鈴木先生には、期限付きで4月に戻って、6月末まで、先生、お願いできませんか。それだったらいいよっていうことになって、鈴木先生が戻るようになったので、帰村宣言したのですよ。そういうことですね。

その間はいろいろ村民との懇談会とか、説明会とか、9月以降、あちらこちらで住民説明会を開いたのですが、村民の方は9割方、みんな反対です、戻ること自体が。

当時は、10月ぐらいになると、原子力災害の損害賠償っていうのがあって、それがもらえるだろうっていうことになって、村民、戻るとそれがもらえなくなってしまうのが一つ、これ、裏話であったのですが、それ、もらえなくなっちゃうっていうのがあったし、また、一番放射線のことについて、みんな不安だから、小さい子どもは戻れなかったってというのは事実なのですね。

だから、当時は川内小学校、中学校のPTAとの懇談会もやったんですよ。PTAもみんな反対です。こんな小さい子ども、いくら川内村が線量低いからと言ったって、どうなるか分かんないでしょうと。それは誰も分かんないよね。

だから、戻らないって親御さんもいたし、だから、戻ったときは、たぶん小学校で十五、六人かな。

中学校で5人ぐらいだとは思いますが、合わせて20人ぐらいは戻ったんだろうと思いますが、当時は全体で80人ぐらいいたんですよ。じゃあ、20パーセントぐらい戻ったんですが、そのほかの子どもは戻らないし、親御さんもみんな反対です。さっきも言ったように、放射線のこと、除染のこと、みんな村民からは一度も褒められたことないです。いつも苦情の電話、説明会でも苦情、もう本当、バトルですよ。そういう本当につらい思いをしましたけどね。

★川内村がフロントランナーになる

ー除染が世界で前例がない状態で、川内村は初めて除染に着手して、そこの地域に戻りましたが、先に帰る人たちはどのような不安を感じていたのかを教えてください。

井出：当時、私は川内村単独で、もう本当に原発に、震災前は原発に、当時300人ぐらい通ってたんだから、もう原発に行くことできないし、あと、双葉、富岡、大熊あたりのスーパーで働いていた人もいるし、サービス業も働いて、500人ぐらいは浜の方に行ってたのね。

こういう働くことできなかったの、川内村が先にフロントランナーで戻ってということ自体が、川内村で生活圏を、当時は築くしかなかったの。だって、大熊、双葉、富岡には行けなかったんだから。もう東はシャットアウト。だから、西のほうに目を向けながら、まさか都路とか、小野町、船引と合併するわけにもいかないし、だから、川内村の単独で、そういうスーパーとか病院とか学校とか、そういうものを川内村単独ってというのは、当時から村長に申し上げていたし、村長もそういう考えだったよね。

だから、川内村独自の生活圏をつくる方がいいのかなと思って、当時は5000人の目標で、川内村の復興計画を作ったわけだから、もう目標がないと、やっぱりどうやって、復興すんだってということなんだけど、やっぱり就労の機会が失われちゃったでしょ？原発が爆発したことによって。当時はそんなことを思っていましたけどね。

ーそういう意味では、川内が先にやらないと、その次がもう続かないというような使命感はありましたか。

井出：除染をすることも、やっぱり住民を戻すための一つの手段なんですよ。家の線量が高いから戻らないって、当時はずいぶん言っていましたから、だから、川内村は、最初に高圧洗浄機で屋根に水をかけましたよね。あれって川内バージョンだけだから。そのあとはみんな、ウエスで全部屋根を拭き取る、セシウムを拭き取るのが除染なの。川内村だけが、当時、高圧洗浄機で水をかけたんですが。

当時、天皇皇后両陛下が川内村に来たときも、今の上皇、天皇陛下から質問があったの。この水はどこから汲んできて屋根にかけているのですかって。

だから、天皇陛下は、当時は木戸川の水からくんで屋根にかけていたのでは、当時、川にもセシウムがいっぱい、放射線物質が川底にたまっていることだったので、天皇陛下はそういう質問をしたの。

いやいや、実は川内村は、上水道のない村で、全て地下水から飲料水を確保しています。この水も井戸から汲み上げて屋根にかけていますから、この水には放射性物質は含まれておりませんということで、私、説明したったんですが、本当にそういうことで、除染についても川内バージョンでやったんですが、それだって、除染1軒やるのに600万ぐらいかかるわけですから、本当に川内村の1年間の予算って、震災前であれば大体一人100万円とすると、30億ぐらいの予算しかなかったのですが、除染だけでもう300億ぐらい使いましたね。本当にすごい費用ですよ、この除染。

これだけ日本というのは、やっぱり国の考えでは、放射性物質を取り除くために、チェルノブイリなんかでは、ロシアは広大な敷地だから、土地を投げ捨ててもいいんですよ。

でも、日本って、やっぱり元の生活に戻そうっていう国の考えがあったから、その除染までして住民を戻そうという国の考えに従って除染を実施したっていうのも一つの行政的な役割なのかなと思いますよね。安心安全の部分ですよ、最終的に除染をするっていうのは、住民の要望だったのかもしれないね。

★誰もが被災者

－震災時、法人格と個人格との葛藤の中で業務に当たったと思うんですが、行政職員同士でのバトルのようなものはありましたか。

井出：実は3月の12日、爆発してからなんですけど、もう若い職員も、俺らもそうです、さっき死を覚悟したって言ったでしょう。若い職員も結構、もう富岡町民のこと構わないで、もうみんなでどっかに逃げましょうっていうの。我々って小さい子どもがいるのだからっていうことになって、たまたま災害対策本部を、もう本当に1時間、2時間おきに、状況が変わるたびに、富岡町と川内村合同災害対策本部を開いていたから、その災害対策本部会議を終わって、そうすると、若い職員が、労働組合なのですが、自分は、当時総務課長をやっていたから、総務課長、これから、この会議終わったら、我々の話、聞いてもらえませんかっていうことで、川内役場の2階の会議室に、夜10時ごろだったと思いますね。

そして、我々も避難させてくれと。いやいや、こういうわけで、20キロから30キロは、20キロ以上離れていると、国の方では大丈夫だよって言っているから、今の段階ではどこにも行きませんから、このまま富岡町の村民の対応をしてくださっていうことを若い職員に申し上げたのだけど、課長らはいいでしょと、賞味期限が過ぎたから・・・俺らはまだ子どもも小さいし、妻も妊娠しているし、小さい子どもがいるのに、どうやって課長は補償するのですか？我々の将来をどうやって補償するのですかって言われて、それは私も補償は分かりませんが、公務員としては、皆さんは住民の公僕なので、取りあえず職務にまっとうしてくださっていうことは言ったのですが・・・。

そのときにやっぱり若い職員らから、「何！」って、もう本当にぶん殴られんのかなと思ったぐらい、若い職員も切羽詰まった状況だったのですね。

それからそこでは何もなかったのですが、そんなことで、各課長に申し上げて、じゃあ、若い職員が有給休暇、休暇簿に書いても、それは認めないでほしいということで申し上げました。次の日は、若い職員はみんな、有給休暇簿に自分で勝手に書いて、避難のためと書いて、みんな職場を離れてしまいました。若い職員は、はほとんど離れてしまいました。

だから、川内村では、当時80人ぐらい職員がおったのですが、村長、教育長、副村長入れて19人しか、村の職員はいなかったの。また女子職員は勤務を免除しましたから、若い職員が、そうですね、20から40ぐらいの人、係長なんかも避難したし、さすがに課長はそういう職場離れはなかったのですが、若い職員も何人かは残ってはいましたよ。5、6人は残りしましたが、あとのほうは、まあ30人ぐらいは、みんな職場を、いわゆる欠勤扱いにしたのだけでも、勝手に書いて、有給休暇って認められないと休暇できませんからね、皆さん、会社とか公務員になった場合はね。

そういうことで、勝手に職場放棄しちゃったのですよね。本当に寂しい限りでした、当時は。

－難しいですよ。今、考えても、これからの話を考えても難しいですね、その判断って。

井出：はい難しい。確かに。当時、コロナ化があったら、本当に放射線とコロナって、どちらも目に見えない物質だよ。だから、本当に放射線プラス、コロナがあったら、どれだけコロナに感染して亡くなる人が増えたかなと思うと、今、ぞっとしますね。

あの頃だって、本当に集団避難して、結局、結核、私の昔おやじも感染したように、結核になった人が二人ぐらいいたし、ノロウイルス、胃腸炎になった人が130人ぐらい、ビッグパレットの屋内展示場のシートで130人ぐらい隔離していましたが、みんな、やっぱり不衛生的なものだったのですよ。

そこに、もしコロナがあったら、本当にどのぐらいの人が亡くなっていたかなってというのが、本当、今ぞっとしますけどね。はい。

★コミュニケーションを取ることの大切さ

—震災時、自分の部下に対して指示を出す中で、部下から反発されたことはありましたか。

井出：当然、いっぱいあるよ。だからね、まあよく言われるのは、やっぱり聞く耳を持ってということだから、その相手の言うのも聞きながら、そして、それをかみ砕いて、本当に反応って、もう即判断しなきゃならない事態があるから、もう考えている暇はないのね。

それから川内にいると、こういう田舎だから、世間体はどうか気になったし、人から嫌われたくないという信念も持っていたから。

だから、よくね、まあ学校の先生なんかもそうなんだけど、上から目線という言葉、やっぱり私もそれは嫌いなほうなのね。まあ、どちらかというコミュニケーションを取りながら、もう、例えば今日、会った人がですね、すぐにお友だちになれるような、そういう、スタンスでずっと生きてきたから、そういうのって、すごく大事だと思う。

仕事やるにも、これから皆さん社会人になって、それがよく、すごく大事。自分の殻に、閉じこもっちゃうと、どうしてもやっぱり上から目線になったり、そういうのがあるかなとは思うのね。だから、こういった田舎はやっぱり、この人のうわさとかですね、もう、憎まれたくないとか、そういうのがあるのね。だから、そこは田舎と都会では、その違いはあるよね。

でも、ずっと私は何度も言うようにね、高田島で生まれて、高田島で育って、もう川内村で生きて、川内、高田島の自分のお墓に骨を埋めるつもりだから。やっぱり、この地元もそうだけど、この地域愛というのが、すごく自分自身でも強いと思う。

今、谷さんにも言ったのだけど。川内村の文化の発祥地は、高田島だよ。谷さん「みんなそう思っているじゃないの」って。たぶんね、みんな、そう思っているかも分からない。川内村の人って。その意識は、強いなと思っています。

だから、そういった、その障害とか、災害とかですね。それを乗り越えてこれたのでしょうね。自分では思いますね。

★自分を信じて突き進む

—寿一さん自身もいろんな葛藤や不安があったと思うんですが、ここだけは自分の中で曲げないというか、何か強い信念のようなものはありましたか。

井出：うーん。難しいね。まあ一つは、やっぱり前もお話したかも分からないんだけど、まあ何度も私、言っているけど。やっぱり自分のまあ倫理というか、自分では、この仕事は誰にも負けないという、こ

ういう強い理念があると、そうすると次はどうしなければならないかというのが何か、おのずと先が見えてくるかなと思うのね。

だから何も考えないで、まあ仕事も、皆さんは勉強なんだけど、私らも仕事やるのには、この仕事は誰にも負けないという感じで私もずっとやってきたし。そういう自分自身に、強く言い聞かせというのが必要で、なかろうかなというふうに、ずっと、それは考えてきたし、それは自分でも実践をしてきた。

ただ、やっぱり公務員というのは、その上下の、その、上司と部下の関係って、やっぱり面倒くさい。そこに何か障害があるのですけども。やっぱり、まあ自分自身の仕事だけだったら自分で言い聞かせればいいのだから、そういう心理が働いていたのかなと自分では思います。

★公務員だからこそ住民に与えられるもの

一災害時、井出さんの存在は、避難者の方にとってすごく心強い存在であったと思うんですが、災害時公務員はどういう姿でいれば、住民の方に安心感を与えられるような心強い存在でいられると思いますか。

井出：うーん。そうだね。俺はそんなに知能はよくないけども、知識はいろんな形で、どこから来られても、やっぱりその村のその歴史とか文化とか、その地域とか、あとは人柄とか、ほとんど分かるんだよね。そういった知識があるから、頭が悪くても、それで乗り越えられてきたのだらうと思うよね。

だから結局まあ百戦錬磨ではないけども、時には腹立たしくなる時もあるよ。本当に、あの、懇談会の話ね。前も言ったかも分からないけど。まあ村長がいて、我々村の職員がいて、村民がね、もう20人というんだけど、それ、どんどん、どんどん質問して。

私、除染とか復興で褒められたこと一度もなかったと言ったでしょ。いつも怒られっぱなしなのよ。村民からは。村民はもう、こんな放射能をね、こういった原発事故というのは人災なんだから、それをどうして村ももっと東電とか国に強く言えないんだ、ということは、しょっちゅう言われてた。

でも、我々はね、やっぱり中立の立場で、東電が悪いとか国が悪いとか住民が悪いとか、そういうことではないんだよね。そういった知識をやっぱり少しでも、あの放射線のことなんか、本当に震災時は何も分からなかったからね。今でこそ、答えられる程度にはなったんだけど、そういう放射線のことを聞かれても、よく分からなかったし、俺らも勉強して、村民に伝えても、それは100パーセント、「何、言ってんだ、おめえ」なんてね、もう村民の皆さんは、そういう口でくるから。

でも、そこは、じっと我慢しながら、はらわたが煮えくり返るのだけでも、そこは抑えて、自分で感情を抑えるということも、ずいぶん経験、体験はしたね。皆さんだって、あるでしょう？ 誰かに文句言われると頭にくる時もあるでしょう。でも、皆さんはね、まだ若いから、すぐ頭にくるとカーツとなるけども、俺らはもう年寄りだから、そこでちょっと、かみ砕くというのは、穏やかさを装って対応するということだから。

まあ、そういう苦情が、いろいろ知識があるからこそ、対応できるのかなと思うね。うん。

一やっぱり、日頃からいろんな人とコミュニケーションを取ってきたからこそ、そのような知識がついたということですね。

井出：そうなのだよ。だから、一番は、どこに行ってもそうだけど、我々、仕事もしていますが、学校生活だって、そうでしょう。やっぱり、その学校の中でも、大学の中でも高校の中でもね、その雰囲気

悪いと全然、まとまらなくなっちゃうでしょう。だから、そのコミュニケーションというのは一番大事な
ことではなかろうかなって私は思うね。これから社会人となるのでしょうか、上下関係はありますけど
も。まあ時にはそういう人もいるよね。

もう自分の殻に閉じこもって、何も話さない人もいるし、余計なことしないよという人もいるし。ま
あ、どちらかというとおせっかい焼きさんなのでしょうね。たぶん自分はね。そういうのがあるから、
地域の人との信頼関係も、ここでまずコミュニケーションよくすると地域の皆さんからも信頼があつて、
ああ、あの人だったら大丈夫だねって、そうなるし。

まあ例えば、とっつきにくい人に、この人にいくら話しかけても返答がなければ、それで終わっちゃうで
しょう。話しかけて対応することによって、この話の会話がどんどん、どんどん前に進むから、感情をそ
こで、どう相手に伝えるかなんでしょね。

そういうのでね、本当にね、この震災で、あんまり絆というのは、我々もあんまり感じなかったんだけど、
この大震災があつて避難して、やっぱり人から、いろんな物資をいただいたりですね。それから、ボラン
ティアで来ていただいたり、そういうのがあると、その絆というのは確かに生まれるわ。

特に、あの何をやっていいかわからない時に、そういったものがあると、お互いに自信がつく私は絆とい
う言葉が最初よく分からなかったけど、この震災でよく絆というね、相手を思う気持ちというのが、最初
はよく分かったかなって自分では思う。

★川内村に生活圏を作る

—今まで震災当時のお話をしていただきましたが、震災当時から今までの暮らしやお仕事の変化につい
て教えていただけますか。

井出：仕事の面では、何度も言うように、川内役場って、最終的に村民福祉向上のために仕事をやります
よね、で、今度は震災後、2011年、2012年の4月に行政再開したのですが、私も総務課から復興対策課
長を命ぜられて、除染と復興についてなんですね。

逆に言うと、復興って何？、いつも皆さんに聞くでしょう。復興って、やっぱり元の生活に戻ることも
なんだよね。でも元の生活に戻れる状態じゃないんです。どうしてかっていうと、村民ももう本当、200人ぐ
らいしかまだ戻ってなくて、これからどうやっていこうかなっていうことに考えると、そうか、もう今は
原発で働くこともできないし、川内村は単独で、川内村内で生活圏をつくれればいいんだっていうことにな
って、買い物、病院、それから働く場所、こういったものを確保すればいいのだからっていうことを、当
時考えましたね。

じゃあ、今でいう YO-TASHI ありますよね。ファミリーマートとか、あと工業団地、あそこにも働く
場所、原発で働くこと、もうできないのだから、そういうことを、一応当時は復興対策課長としても、そ
ういうことを提案したら、村長、それでいいよっていうことになって、実は工業団地、あれ、11区画あ
るんですが、田ノ入工業団地も2012年に初めて、地権者、約70人ぐらい地権者がおりおました。面積
は17ヘクタールぐらいあるんですよ。その地権者を集めて、じゃあ、村長、ここの田ノ入工業団地を
つくって、原発に行っていた分をここで働かせようっていうことになって、そうすると、川内村でいろん
な、就労もそうですし、買い物もそうだし、生活圏が確保できるわけだから、そういうことを狙いとして
いた。

まして川内村は、帰村から行政機関も一番早かったので、川内村単独でそういう、生活圏をつくれればい

んだなっていう、そういうことを考えていたね。

ー復興課長として働く中で、ほかに思い出に残っているエピソードはありますか。

井出：やっぱりあとは除染だね。これ、除染というのは、本当に世界で初めて除染を川内村がやったんですね。これは当然、我々も分かんないから、当時、JAEA って、日本原子力開発機構ってあるんだけど、その JAEA の協力によって、除染ってこういうふうにやんだよっていうことで除染をやったんです。川内村は、もう民家除染をやって、小中学校も除染したのですが、最初は、家があると、まず屋根に、高圧洗浄機を使って。屋根にはセシウムが侵されているので、屋根に水をかけて、下にセシウム等の放射性物質を下に落とすんです。

落ちたらば、庭ですから、ぼたぼたって、セシウムはみんな庭にありますよねって、5センチ土を剥ぎ取って、それをフレコンバッグに詰めて、仮置き場に持っていくっていうことなんですけど、この除染っていうのが、初めて仕事をやったんですね。

これは川内村の予算でありながら、もう 100%国庫金で賄えるので、例えば、じゃあ、10 億かかりますっていったときに、10 億を請求をして、除染をやったのですが、やっぱり思い出としては、除染をやって、なんで壁にも水かけんだとか、なんでこんな植木なんか取っちゃうんだとか、そういう。除染をやってても村民に怒られっ放しです。除染やってくれてありがどうって言われたことは一度もなかったね。隣はあのようなことをやっているのに、なんでうちはやってくんないとか、苦情ばかりでしたね。いい思いはしなかったです。職員時代はとにかく。

あとは、企業誘致とか、それは、前にもお話をしたかも分かんないけど、本当に川内村って、40 年間、私も役場にいたけど、行政で仕事を持ってきたっていうのはないからね。

戻って、2012 年から 2013 年にかけて、四つの企業を川内村に誘致、コドモエナジーなんかもそうだし、あとはバス路線なんかも、生活圈だったので富岡から西のほうに、田村市の船引町とか、あと、小野町のほうに、バス路線を走らせたし、いろんな本当に突っ走ったっていう感じが、そんなことかな、思い出ということになると。

★復興の先に目指すもの

ー今行政の仕事のお話がありましたが、川内村における行政の役割をどのように考えていたのかを、震災当時と、震災後に行政の第一線で活躍していた時、そして現在の三つのそれぞれにおいて教えてくださいませんか。

井出：これは当時も今も全然変わってないのですが、生活圈を確保しようっていうのが頭にあると、じゃあ、とりあえず住民は戻して、そして、地域を活性化して、いろんなイベントを開いて、開催して、交流人口を拡大すれば、川内村がもっともっと有名になるなど思ったんですよね。

だから、この間、日本のマラソン選手で、川内優輝選手が頑張ったよね。たまたま私も職員時代の復興対策課のときに、日本記者クラブっていうのがあって、そこで、東京で講演したんだよね。2012 年の 12 月ぐらいだったと思うのですが、ちょうど埼玉県庁から来ていた人が、井出さん、今の話、よかったから、川内村を埼玉県として何か応援したいんですっていうことになったんですよね。工藤さんっていう人、今でも覚えています。日本の記者クラブで講演したときに、川内村の帰村までちょっと説明したときに、工藤さんも含めて埼玉県庁から 4、5 人ぐらい話を聞きに来てたんですよ。そして、県庁として応援するか

らって。

当時、覚えていたよね。川内優輝選手、公務員ランナーとして結構、頑張っているのがニュースになっていたの、じゃあ、川内優輝選手、同じ川内なので、川内優輝選手にちょっと話をしてもらえませんか、川内村にいつか来てもらえませんかっていうところから、始まったんですよ。

これも本当に、それで「かえるマラソン」に発展したんですが、その2013年のたぶん12月ぐらいに、川内優輝選手がここに初めて来たんです。

そのときに、子どもたちと一緒に川内村の体育館でイベントをやって、消防署前のロードを一緒に駆けっこしたんですね。当時、川内小学生だったね。小学生の子と一緒に走ったときに、将来、川内村もマラソン大会ができればいいねっていうところから、「かえるマラソン」に発展したわけですから、こんなことも思い付きでやったエピソードの一つかなと思うんですが。

本当に川内優輝選手もう36歳か。あのときも頑張って、オリンピック代表にいわく、何とかなんないかなって、36キロまで独走体制でいたんだけど、最終的に37キロ付近で追い抜かれたんだけど、でも、追い付かれて、普通は脱落するんですが、川内優輝選手はそこからまた復活するっていうのがあって、最終的に4位になったんだよね。

川内優輝選手も、今も来ても、井出さん、本当にありがとうございましたって、当時、春日部高校で公務員だったので、夜間の学部の生徒の授業料の切符切りやっていたんですよ。夜間部にいたんですよ。

当時、私も、春日部高校に行って、川内優輝選手とアポを取れたので、当時、副校長先生と一緒に対面して、じゃ、何月何日、そしたら12月はボストンマラソンもあるし、ボストンマラソン終わったら川内村に行きましょっていうことになって、2013年の12月に来てくれたんですよ。それが始まりでしたけどね、エピソードは。そんなことかな。

本当にいろんなことをやりましたが、それもいい思い出だね、今となっては。

★人と人とのコミュニケーションが宝に

一井出さん自身の経験として、震災当時から国交省、総務省、環境省などさまざまなお仕事をされた中で学んだこと、得たこと、教訓など教えてください。

井出:そうですね。だから、仕事の面では、自信を持つっているのが一番かなと思うんですよ。

私は、知能は低いかもかもしれませんが、でも、知識はいろんなことを学んで、知識は勉強してきたつもりなんで、その積もっているんですね。仕事の面で言うと、やっぱり自信を持って仕事をしたことは、今もプラスになっているかな。

あとは、上から目線ではなくて、もう対等に向き合って。上から目線ではいたくないなって思うときはあるんです。感情極まって、時にはそういう踏み外すときもあります。でも、基本的には人間関係で人のぬくもりを、この人と話をしてよかったなと思えるような、そういう人に今後もなりたいたいかなって、自分では思っています。

他人はどう思うか分かりませんが、やっぱり、大事なことは、自分の倫理を積み上げていくことが一番いいのかな。自分はこういう人間になりたいんだっていうのが大切なんだろうなっていうふうに思うね。

やっぱり、この仕事は俺しかできないっていうこと、自信を持ちながら仕事をする、何とかなるもんですよ、これ、本当。

これが次の段階につながるわけだから、やっぱりこの人と人とのコミュニケーションというのも、すごく今回の震災では宝になったかなと思いますね。

★いまだに願う、地域の発展

ー井出さんが、いろいろな行政職に関わってきたことの感想を、先ほど学んだことなどと併せて教えてください。

井出：そうだね。だから、退職しても、いろんな部署に就きながら、今だって、さっき役職を言いましたけど、とにかく俺は、今度は川内村もそうなんだけど、第1区、高田島がよくなると川内村がよくなるから、特に高田島は現在区長をやっているの、もう1区だけでも発展していきたいなと思っています。1区が発展すると、川内村も発展するだろうなと思いますから、第1区高田島って、やっぱり川内村の文化の発祥地、先進地だと、自分では思っているの。そう思っていないとなかなか行政区ってまとめられませんから、いろんな役員会、婦人会、老人クラブと一緒にあって、地域の発展をいまだに願っています。

★村民とのバトル

ー川内村の復興とかに向けた政策を取られていて、住民と関わるが多かったと思いますが、その中でどのような問題が生じていたかのお聞かせください

井出：放射線について、やっぱり村民の人って、ネガティブですよ。こんな線量の高いのに戻れるかっていうのが、説明会、住民懇談会、もう70回ぐらいやったんです。

あとは、東京電力の損害賠償について、「その20キロラインってどこなんだ？」っていうことになって、それでトラブった面もありますね。

あのとき、もう20キロ圏内だって言ったじゃないですかって言っても、聞いてくれなそいのね。結局、第一原発って1号機から6号機まであるんですが、この幅は1キロぐらいあるんですよ。だから、どこを起点にするかによって、20キロラインというのは変わるし、20キロ圏内だと、損害賠償も全然違うの。そんなことあって、今度も50万もらえるか、300万もらえるかっていうのがあって、これで東京電力の損害賠償審査会のほうで追加、精神的な苦痛で追加、こうするっていったときに、これは、2012年ぐらいから損害賠償っていうのが始まって、この件についてもずいぶん、なんで川内村は帰村したんだと、もう帰還したから損害賠償もらえなくなっちゃった。このように除染と損害賠償と放射線については、いつもバトルでしたね。

★川内村は合併せずに単独で動くべき

ー震災後の、村全体の変化と変化に対する考えについて教えてください。

井出：そうだね。2011年に震災あって、2012年に住民戻ったときに、150人から始まって、2018年まで2200人、ずっと右肩上がりだったの、村民がね。85%ぐらいまでなった。2019年から逆に右肩下がりになって、今は1,950人弱になっちゃいました。

高齢化率も、2011年は34%ぐらいだったのですが、今は二人に一人、50%を超えています。つまり二人に一人は65歳以上なんですよ。

だから、2018年から4年過ぎて、この人口の減少がどこまでなるか。いつの時点で若い人たちをここに住み続けられるかっていう。だから、それは移住・定住を進めていりわけなんですけど、これもやっぱり働

く場所、それから住む場所、それからサービス業がどれぐらいあるかっていうことになると、川内はもう本当に買い物、困るね。日用品がね、スーパーがないから。これがやっぱり一番、痛い。それから双葉郡に高校がないのも痛い。あと、病院ですかね、最終的には。二次的な医療機関がないのが痛いから、この3点、どう解決していくかが今後の行政の課題だと思いますよね。

だから、被災12市町村がみんな、うちのところに来てくれ、来てくれって。みんな、この辺は引っ張り合いなのよ。富岡町が2,000人超えてます、今。川内は、一時は川内のほうが多かった。2,200人の時代は、2018年は、富岡は1,700人ぐらいだったんです。今、2,000人超えてますから、富岡が多くなっちゃったんですが、これからやっぱり浜通りの、結局広野、楡葉、富岡、大熊、双葉、浪江ってあるんですが、この沿線は強いんじゃないですかね、原発がなくとも。

これから伝承館とか、おそらく第一原発っていうのは、おそらくチェルノブイリとか、スリーマイル島って、当時、事故を起こしたときがあって、そういったところに、これからも見学がどんどん、世界各国から来るんじゃないかなと思う。

川内村、どうすればいいのっていうことで、双葉郡の一角なんですけど、いずれ双葉郡8カ町村は、どっかで国のほうは合併したらっていうことを言われるかもしれません。そのときに村長がどういう判断するかなんだけど、私は個人的に、この双葉郡8カ町村、一つになっても川内村のメリットって何かな、合併して何かメリットあるかなあ。私は何もないな、川内村はずっと単独で動いたほうがいいんじゃないかなっていうふうには思うわけなんですけども。

3. かわうちラボと村民

★村民を巻き込んで、オール川内で

ーかわうちラボは行政ではできない役割を担うために設立されたとホームページで拝見しましたが、その役割についてお聞かせください

井出：役割っていうのが、行政だといちいち発議をして決裁をもらって。というのがありますが、ラボだと、その決裁をもらうまでの時間っていうのは、事務局長の段階でかなりできる面もあるんですよ。かわうちラボは、結局村づくり公社なので、研究所なので、これをオール川内村の人たちだけで川内村を地域発展させよう、地域の振興をさせようっていうのがラボの狙いなよね。オール川内村で。地域の発展と交流人口の拡大、最終的に移住・定住につなげる、オール川内村で川内村の地域発展をさせようっていうのがラボの基本的な目標なんです。

これって、やっぱりラボはそういうことなんですけど、ラボで必要なのは、スタッフのやる気と、それからもう一つは、いろんなイベントをやるための財源の確保が必要なんですよ。

だから、財源をいかに確保するかっていうのが、ラボの課題なのかなと思うんです。いくらやりたくたって、人がいなければ、それからいろんなイベントの催しだってお金かかるわけだから、その財源の確保っていうのは必要だから、それはやっぱり今後も必要ですよ。それはいろんな地域の伝統という補助金とつながり補助金とか、そういうものを利用してね。

★人のぬくもりと豊かな大自然

—かわうちラボは、川内村の資源とかを活用したり、魅力とかを生かした活動とかを行っていると言いましたが、寿一さんの思う川内村の魅力を教えてください。

井出：川内村ってやっぱり大自然ってどこにもあるのだけでもこの豊かな大自然、それから人のぬくもりが、私はキーポイントだと思っていますし、そうですね、川内村って、この2011年の東北地方太平洋沖地震で震度6を観測しながらも、家の倒壊とか、道路が寸断されたとか、1件もないんですよ。

この阿武隈高地の地盤は、花こう岩に覆われていて、だから、水もおいしい、川内村っていう名前付いたこともあって、川内村の水も、大中小河川があるから、自然豊かなんだなど。地盤もしっかりしていて、そこから汲み上げているから、水もおいしいんだろうなっていうことで、やっぱり人のぬくもりと、豊かな大自然、それにプラス水ですね。

★「かえるマラソン」や「川内高原 FUN ラン」

—かわうちラボを設立したことによる村や村民の方たちの変化は、何かありましたか。

井出：やっぱりかわうちラボって、当時は「何だ？」ということで、ラボラトリー、研究所なんですけど、どういふことをするかっていうことで、やっぱり交流人口拡大なのね。

一つは「かえるマラソン」、あと、トライアスロンも、これ、復活したのだけでも、そのほかに、「川内高原 FUN ラン」とか、いろんなイベントを仕掛けることによって、首都圏からの交流するための人口拡大することが一つの目的なのね。

これはオール川内村で、いろんな人のご協力を得ながら、コテージに泊まったりっていうのがあって。でも、なかなかこれって、移住・定住も最終目標っていうことを言ったんですが、これってみんな、やっぱり被災12市町村は同じことをやっているんですね。川内村のいろんなイベントを催して人を呼ぼうとしているんですが、これはやっぱり交流人口の拡大のためにやることなので、ラボの目標っていうのはそういうことですね。

★ラボ単独でも、個人的にもできないことを

—観光事業とか、イベントなどを行う際にも、村民の方たちとかだっぴり協力が欠かせないと思うのですが、村民の方たちとつながり続けていくために大切にしていることはなんですか

井出：これは人の話を聞くっていうことかな。相手の目を見て話すことによって人間関係が生まれてくる。そして人間関係が生まれてくると、ラボには協力しなくちゃなんないなっていう、そういうのがすごく大事だと思う。

本当は交流人口を拡大すれば、結局、村民所得向上につながるわけだから。でもそこまでは村民の人は思っていないから。だから、人の話を聞かないで勝手に動いちゃうと、村民の人は何も協力してくれない。だから、いろんな機関の長とか、村民を大切にしなくちゃなんないなっていうふうに思っているから、川内村の行政相談委員も引き受けて、いろんな立場で対村民とのコミュニケーションを取ることが一番いいのかなと思います。

さっきオール川内って言ったのは、そういうことですよ。ラボ単独でも、個人的にもそういうのはできないから、みんな、村民を巻き込んでやることによって、その地域は発展するのかなっていうことなのね。

復興っていうのは最終的に村民の皆さんがどれだけ震災前の川内村の生活の様子に戻るかっていうのが

ポイントかなと思う。それには所得拡大しなければ、いくらそういう気持ちをもっていても、毎日遊んでいたのでは収入がないでしょう。たぶん皆さんのお父さん、お母さんもそう。皆さんを大学に行かせるために、お父さん、お母さんはずいぶん苦勞しているからね。だから、そういうお父さん、お母さんも大切にすると同じように、私も村民の皆さんを大切にしていきたいなというふうに思いますね。

★いろんな切り口で、いろんな面から、今後もしできる限り

—今後に向けての質問です。これからどんなことに取り組んでいきたいですか

井出：そうだね。個人的には、もう 70 歳なのですが、今、冒頭に言ったような役職関係で、私も一つの目標を持っていますよね。だから、これをいつまでできるかなんですね。

確かにもう 70 になると、もう記憶は、喪失する場面もあるから、いつまで自分ではできるかなと思うんですが、できる限り、皆さんもそうです、来た人に対しては心を持って接していきたいなと思っていますし、そうでなければ川内村は発展しないだろうな。

村民との対話っていうのはすごく大事だなと思っています。今、シルバーならぬゴールド人材センターを立ち上げたのも、これもやっぱりゴールド人材センターの会員、今 50 人ぐらいいるのですが、これで草刈りをやりながら、こういう話をしたり、そして、老人の所得拡大につながるのでしょうかね。あとは、草を刈ったり、掃除をすることによって、その家は掃除する人がいないから頼みたいって、村民の利便性の向上にもつながるわけですから。私もそのゴールド人材センターのほうもお手伝いしているっていうのはそういうことで、このゴールド人材センターも村民の、会員の親睦と、それから村民の、会員の所得拡大、そういったところに持っていければいいかなと思います。

いろんな切り口で、いろんな面から、今後もしできる限り。何歳までできるか分かんないです。

★やっぱり夢と希望は持たなきゃ

—最後の質問です。学生たちに伝えたいメッセージなどがあれば聞かせてください。

井出：これはいつも思うんだけど、やっぱり夢と希望は持たなきゃなんないね。学生であれば、とにかくいい点数、成績を取ることも目標でしょうけども。自分はどういう大人になりたいか、どういう会社に就きたいかっていうことで、知識と知能を生かして、将来的にそういうことにつながっていけばいいかなと思うの。

皆さんなかなか難しいでしょうけども。私も最近すごくそう思う。でもやっぱり目標がないと。なんでもうちちょっと小学校、中学校のとき勉強しなかったかなって。自分は百姓やるからそれでいいんだっていうことは、今も反省している。

だから、希望と目標はしっかり持たなきゃなんないし、これは何回も言ってますけど、自信を持つことかな。

【学生の感想】

井出寿一さんへのインタビューを通して、災害時における自分がすべき共助を具体的に見いだすことができました。インタビューをする以前は、災害時に共助を行うといっても、自分に何ができるのか、そもそも自分が役に立つ存在なのかというように、共助における自分の役割を見いだせずにいました。しかし、井出寿一さんのお話から、SNSを通じた情報の取得・発信や他大学との連携によるボランティア人員の確保などといった、私たち学生だからこそできることが多くあることに気づきました。そのため、もし災害が発生したときには、先ほど述べたような学生だからこそできる共助を実践したいと思います。また、このインタビュー記事を読む人々にとっても、このインタビュー記事が自分ができる共助を見いだすきっかけになると嬉しいです。

行政政策学類1年 久保田苺吹

東日本大震災が起きたのは、私が小学校にあがる前です。当時は秋田で暮らしていたため、被災地の状況については何も知らないといっても過言ではありませんでした。福島市で暮らすようになってから震災について学ぶことも多かったものの、被災地にいた人の、当時の状況や思いなどを実際に現地へ赴いて自分の目で見て、聞いてみたいと考えるようになりました。アーカイブ活動では、井出寿一さんのインタビューを通して、当時の立場だったからこそ苦渋の決断などを知ることができました。直接伺ったからこそ井出さんの表情や声色が忘れられません。この冊子では文のみではありますが、東日本大震災から13年という年月が経過した今でもたくさんを知り、学べるものとなっています。ぜひ、何回でも全文インタビューをご覧ください、得たものをこれからに活かしていって頂ければと思います。

行政政策学類1年 佐藤飛鳥

井出寿一さんへのインタビューや川内村などへのフィールドワークを通して、震災が人々に与えた影響や、その後の復興の難しさやその意味について学びを得ることができました。とりわけ、井出寿一さんへのインタビューからは、震災という災害時に公務員はどのような行動をとるべきなのか、村など一つの地域としてどのように動くべきなのか、深く考えさせられました。その際に、井出さんが村民の方々と深い信頼関係を抱いていたことが避難時に大きな良い影響をもたらしたことから、日頃から良いコミュニケーションをとり信頼関係を築くことが、公務員としても、社会を生きる上でも大切なことであると学びました。全文インタビューは、インタビュー時の井出さんの声をそのまま掲載しています。井出さんが震災時にどのような気持ちでどのようなことを考えていたのか考えながら読んでいただけたらと思います。そして、少しでも震災や避難を経験した方について考えるきっかけになれば幸いです。

行政政策学類1年 佐藤光